

Newsletter

INSIDE THIS ISSUE

1. 研究発表要旨
2. シンポジウム要旨

【研究発表要旨】

A室1

障害児の叙情性

—— 川端康成『美しい旅』『続美しい旅』と『ヘレン・ケラー全集』をめぐって ——

コロンビア大学（院） スティーブン・チェ

川端康成が『少女の友』に連載した『美しい旅』（1939年7月—1941年4月）と『続美しい旅』（1941年9月—1942年10月）は、目も耳も不自由な少女の教育過程を描いた障害者文学（disability literature）として非常に興味深い。川端の少女小説のいくつかは代表作であったことが知られているが、『美しい旅』に関しては、『ヘレン・ケラー全集』（1936年11月—1937年3月）を参照したという川端自身の言及や、取材のために盲学校や聾啞学校を参観したという事実があり、川端自身の創作である可能性が高い。この作品に表れているのは、1920年代に新感覚派としてモダニズム文学を志した川端が、ケラーの体験から学び得た新たな「感覚」の表現と、

その表現法で描き出した「真に純粹」な感覚を持つ「障害児」の姿である。

続編の『続美しい旅』の連載が始まった1941年には、「国民学校令」が公布され、「日本少国民文化協会」が設立されており、戦時下で子どものアイデンティティが大きく変動した時期ともいえる。こういった変化に応じるように、作品は日本と満州の障害者向け学校の紹介に徹するようになるが、本発表は、そういった時局のなか、川端が障害を持つ子どもの身体を通じて何を描きだし、ヘレン・ケラーの存在が彼にいかなる示唆を与えたかを考察する。近代日本における子ども観と文学の関係性を探る試みの一環として、「障害児」像の文学的意義を探る。

A室2

太宰治「竹青」の英訳に関する一考察

—— 翻訳者の著者性と異化翻訳の試み ——

筑波大学（院） 蔣静瑶

「竹青」（『文藝』1945.4）は、太宰治が清代の作家蒲松齡の怪異小説集『聊齋志異』中の同名の物語に取材して創作した短篇小説である。太宰の短篇作品は、1950年代に、CIAが関与した雑誌『エンカウンター』（*Encounter*）に「桜桃」と「女について」の英訳が掲載され、「ヴィヨンの妻」はユネスコの協力を得て出版された英訳の短編小説集 *Modern Japanese Literature: From 1868 to Present Day* (Grove Press, 1956) に選ばれている。『斜陽』と『人間失格』など長篇の英訳も単行本で出版されたが、「竹青」のような代表作と見なされないものは、この時期には英訳されなかった。しかし、2023年現在、「竹青」は英語のみならず、中国語・韓国語・イタリア語・フランス語・トルコ語に翻訳され、数多くの言語で読まれるに至っている。

本発表では、主にローレンス・ヴェヌティ (Lawrence Venuti, 1953-) の提唱する「翻訳者の著者性の承認」と「異化翻訳」（起点言語・文化に忠実に翻訳すること）とを視座に、太宰治『走れメロス』や多くの村上龍作品の翻訳者でもあるラルフ・マッカーシー (Ralph McCarthy, 1950-) 訳の、太宰治短編小説集 *Blue Bamboo: Tales of Fantasy and Romance* (Kodansha International, 1993) と *Blue Bamboo: Tales by Dazai Osamu* (Kurodahan Press, 2012) を検討する。訳者序文と訳文の分析を通して、マッカーシー訳「竹青」の特質、「竹青」が翻訳された背景、そして、マッカーシーは「竹青」および太宰文学全体をどのようにとらえていたのかについて、考察していきたい。

森鷗外と code-switching の詩学

——「カズイスチカ」を中心に——

上智大学 河野至恩

森鷗外は、しばしば日本語の小説の語りの中に外国語のフレーズをカタカナあるいはアルファベットの表記のまま使うことで知られる。本発表では、こうした表現の方法をcode-switching(言語切り替え)、つまり複数の言語を使い分ける文学表現として理解し、その表現の詩的効果と意義について考察する。

本発表では、鷗外のこうした表現の可能性を考えるうえで、「カズイスチカ」(1911)を中心に考察する。この小説では、三人称の語り手の語りは主人公の花房に焦点化されているが、この語り手はラテン語 (*loco citato, casus*) やフランス語 (*coup d'œil, résignation*) をアルファベットで表記している。こうした表現は、*résignation* など小説の鍵となる概念を原語で正確に表そうとする姿勢を示している。さらに、こうした外国語のフレーズが繰り返されることにより、西洋文明に通じる語り手や花房と、ひとつ

前の世代で西洋医学の知識は限られているものの直観的に患者を診察する花房の父が対照的に描かれるという効果もある。本発表では、この小説の他、同時代の「青年」(1910-11)「妄想」(1911)などにも言及し、この時代における鷗外の表現の特徴を探りたい。

これまで、鷗外のドイツ語の深い知識と運用能力については多くの研究者が指摘しているが、鷗外の小説テキストにおけるドイツ語以外の言語の使用については管見ではほとんど研究の対象とされていない。しかし、これらの表現は、文学の作者が複数の言語をどう使い分けるのかという、文学表現の問題の一側面と考えることができる。また、このように外国語を「翻訳せずに」使う方法は、翻訳理論における「翻訳不可能性」の問題系に位置づけることも可能だろう。本発表では、鷗外の文学表現をそうした理論的文脈にも位置づけてみたい。

バチェラー八重子『若きウタリに』が語る「故郷」と「異郷」

—— 第7篇「英国に旅して」を中心に ——

東京大学(院) ディ マルコ ルクレツィア

昭和初期アイヌ歌人の代表的な存在であるバチェラー八重子(1884-1962)は、聖公会の伝道者であった養父ジョン・バチェラー(1855-1944)の出張に同行し、1908年に英国に渡る。その当時の様子は、昭和6年(1931)に「心の花叢書」の一冊として刊行される短歌集『若きウタリに』の第7篇「英国に旅して」において記録され、近代短歌史上特筆すべき羈旅歌の例として村井紀によって評価されている。しかし、なぜ異郷の情景が語られる短歌を本歌集に収める必要があったのか。

『若きウタリに』は、アイヌの現状とそのあるべき未来について、八重子の考えを短歌に表現し、若い同族に届ける試みから生まれた作品であり、形式上はアイヌ語と日本語の併用、内容上は八重子の背景にあったキリスト教と

アイヌ文化という二重性を基に構築されている。この構成のなかでとらえた時に、キリスト教の理念を伝える歌や信徒としての理想的な姿を語る歌に比して、単なる羈旅歌と評価された第7篇はやや異質と感ぜられる。しかし、本歌集の意図を考慮すれば、異郷を語る第7篇にも、八重子の紀行を記録する以上の役割が求められていたと考えたほうが自然であろう。

以上の見通しから出発する本研究発表では、「英国に旅して」の短歌は『若きウタリに』という作品の中でどのように読み解けるかを改めて考えてみたい。具体的には、第7篇単体の考察に加え、八重子が生まれ育った有珠町の情景が描写されている第4篇「故郷」との比較を行うことで、第7篇の意義を明らかにする。

『オデュッセイア』から『ザーヒル』まで
—— ペネロペイア像の歴史的展開を巡って ——

岡山大学 ハルミルザエヴァ サイダ

古代ギリシアの吟遊詩人ホメロスの作品とされる『オデュッセイア』は、時空を超えて口頭伝承、読み物、映画等の形で嗜まれ、今日まで生き続けてきた「不朽の物語」である。近現代において作られた『オデュッセイア』の翻案作には、例えば、アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスによる20世紀初期の小説『ユリシーズ』やブラジルの小説家パウロ・コエリョ (Paulo Coelho) の『ザーヒル』(O Zahir) 等がある。これらの作品は『オデュッセイア』から影響を受けながら、女性像の描き方が特徴的である。例えば、2005年に発表された『ザーヒル』は、貞節と忠実さの象徴ともなった、主人公オデュッセウスの妻ペネロペイアの像を現代社会の嗜好・理想に合わせて書きかえているため、「貞節を守りながら、長年帰還しない夫を待ち続けた妻」は、「ジェンダー平等

な社会に自由に生きる、夫・相手を自由に選ぶ・変えることができる妻」へと変容されている。

本発表では、『オデュッセイア』と『ザーヒル』という作品を中心に比較分析を行い、「ペネロペイア像」の歴史的展開について考察する。併せて、精神分析的なアプローチやジェンダー論的なアプローチを取り、時空を超えて人々の関心を引きつけてきた「オデュッセイア現象」の普遍性やその普遍性の背景にある人類共通の心理、及び『オデュッセイア』の世界文化史における位置付けについて論じる。

「怒り鎮め、私達と共に歌ひませう」

—— 長門美保歌劇団による『ミカド』日本人初演 (1948年) が目指したもの ——

大東文化大学 大西由紀

19世紀末ロンドンの日本ブームが生んだ荒唐無稽な喜歌劇『ミカド』(Gilbert and Sullivan, The Mikado; 1885)の日本人による初演は1948年まで待たねばならなかった。長門美保歌劇団によるこの上演について先行研究は、国辱的と考えられてきたこの演目が戦後間もないこの時期に日本で上演された背景にGHQの意向があったことを暴露している。しかし実際の上演の内容や水準は、これまであまり検討されてこなかった。

本発表では、1948年1～2月に日比谷公会堂で初演されたのち、年末まで各地で公演を重ねた長門美保歌劇団の『ミカド』日本語訳詞上演について、現存する公演パンフレット、台本、関連報道を精査してその実態を確認する。特に注目したいのは「市野民枝・長門美保共

訳」とクレジットされた台本冊子で、これをギルバートのソーステキストと、下訳と見られる市野民枝単独名義の謄写版台本と対照して精読する。

この作業から明らかになるのは、上演用台本の全編が一貫した方針の下に書かれていることである。具体的には、①原曲のリズムの尊重、②「日本」という語の削除、③女性登場人物の言動の穏健化、などが徹底されている。②と③は、現実離れた日本人の役柄を現実の日本人が演じるにあたって、観客に違和感を与えないための配慮であろう。①の特徴と合わせて考えた時、この上演には、作品が日本を舞台とすることにこだわりすぎず、純粹に音響的な楽しさを伝えようとする意図があったように見受けられる。

〈昭和四〇年代カウンターカルチャー再考〉

【基調講演】

対抗気運のポップカルチャー

—— 昭和四〇年代とアメリカ ——

東京大学（名誉教授） 佐藤良明

それが派手やかな社会現象であったためか、英語でいう counterculture は、イメージが具象的すぎて批評用語になりにくい。他方、日本語の「対抗文化」の用法は、抽象的すぎて指示対象の画定が困難である。まずは二つの概念のズレと重なりを確認した上で、「逆行文化」という中間的な、非マジメであってかつ生産的な、呼称を提案したい。

25歳以下の人口が半数を占める豊かさの時代に生じた「逆行する快感の市場」を、ヒップな煽動者が導いた。その中には、ロックの起業家も、幻覚剤のグレーも、SF作家、実験作家、演劇家、土着文化への回帰者、みな含まれる。

幻想と虚構と逆理、風刺とブラックユーモア、見世物小屋的卑俗さといった特徴は、昭和40年代のアメリカ文学においても顕著だ。ピンチョンの『重力の虹』（昭和48年）などは、「スクウェア」な小説に逆行する手法のカーニバルといった様相を呈している。

多方面に拡散しがちな本講演の収束点として、「逃走」という戦略に焦点を当ててみたい。隠遁または匿名性を方法として、メディアによる消尽をすり抜けようとしたアーティストについて考えようということだ。トマス・ピンチョンはもちろん、ヘイト＝アシュベリーで貨幣経済の無化を演出したエメット・グローガンもその一人。プロテスト・フォークの貴公子が電気のノイズを身にまとして、時代のトリックスターとなったボブ・ディランが、さっと身を引き、ザ・バンドの面々と「地下室」でロックの民衆音楽化に励んだことの意義についても考えたい。

【シンポジウム】

司会・講師：静岡大学 堀江秀史

講師：聖心女子大学 スティーブ・コルベイユ

日本映画大学 藤田直哉

コメンテーター：東京大学（名誉教授） 井上健

本シンポジウムは、1960年代後半から70年代前半、ことに歴史の結節点としての68年から70年を基軸に据えて、「昭和四〇年代」という時空間と射程から捉え直そうとするものである。

ベトナム反戦運動、全共闘運動から連合赤軍事件に至るこの時代は、戦後日本において、観念や理念や主義に則ることで「私」を越えようとする志向が、その後に必然的に待ち受ける「挫折」や「転向」を含めて、生の原理や行動規範として機能した最後のときであったと考えられる。この時期はまた、ヨーロッパ像やアメリカ像、外国文学との「影響」関係が大きく変容するとともに、ジェンダー、エスニシティ、メインカルチャー対サブカルチャーの図式、ジャンル混淆、メディアミックス現象などをめぐる状況が一変した、戦後日本文学・文化の大きな転換点でもあった。

村上春樹が『1973年のピンボール』(1980)という、大江健三郎『万延元年のフットボール』(1967)をパロディ化した書名の長篇第二作で前景化せんとしたのは、1968年から連合赤軍事件に至るラディカリズム高揚期の終焉した1973年という地点であったし、その村上が作家デビュー前、大学生として過ごした雌伏の7年間は、昭和四〇年代とそのまま重なり合う。作家村上春樹を準備した昭和四〇年代の再評価は、昭和五〇年代以降の日本文学・文化を考え直すうえでの、欠かせぬ前提でもあるだろう。

この時代の文化や表現の特性と可能性については、戦後日本史再構築の視点より、主に「対抗文化」という切り口から、これまでも多くの考察が試みられてきた。本シンポジウムでは、現代社会の母体となったこの時代を、同時代作家たちの活動を一つの俎上に並べて検証することを目的とする。鈴木清順(1923—2017)、今村昌平(1926—2006)、澁澤龍彦(1928—87)、野坂昭如(1930—2015)、筒井康隆(1934年生)、寺山修司(1935—83)ら、個別の作家・監督たちによる具体的な活動を通じて、この時代に各々が何を考え、文学、劇、映画を作ったか、またそれを同時代社会がどう受け止めたかを報告する。本シンポジウムを通じて、いかがわしくも華やかに、公権力と対峙し、社会を捉え直そうとした才能たちの乱立した昭和日本を、具体的な作家、作品から問い直す機会としたい。

昭和四〇年代における「家畜化」のモチーフと言説

—— 米国のカウンターカルチャーとの比較 ——

聖心女子大学 スティーブ・コルベイユ

人間が家畜化されるという恐れに取り憑かれる20～21世紀の芸術家や思想家は珍しくない。『独裁者』の最後の演説で、チャーリー・チャップリン演じる主人公はファシズムに反対し、人々が単なる「家畜」ではないことを観客に思い起こさせる。最近では、ペーター・スローターダイクが、文化、文学、ヒューマニズムが、一般的に思われると逆に、解放の基ではなく、人間を家畜化(domestication)する主な原因であることを示している。また、森岡正博の『無痛文明論』では、闘争や不自由のない生活が、人間を考えることのできない家畜化された動物にしてしまうと警告している。戦争、新しいテクノロジー(anthropotechnic)、主体性の喪失、環境の変化は、しばしば我々の存在意義を考え直す原因となる。

同様に、1960年代の日本の作家、思想家、映画監督たちは、時には可能性の源泉として、時には疎外感の源泉として、人間の「家畜化」を描く必要性を感じる事が当然であったと言える。本発表では、アメリカのカウンターカルチャーの作家との比較を通じて、池田得太郎の『家畜小屋』(1959)、鈴木清順の『肉体の門』(1964)や今村昌平の『豚と軍艦』(1961)、野坂昭如や澁澤龍彦のエッセイなどを分析し、日本の60年代に生まれた「家畜化」に対する新しい視点を理解し、紹介する。

筒井康隆の、昭和四〇年代における『革命』

日本映画大学 藤田直哉

1960年にデビューした筒井康隆は、60年代後半に大変な「流行作家」になった。1968年には4冊の短編集、1969年には5冊の短編集・長編小説が刊行されているほどの人気である。SFという新しいジャンルの旗手として活躍しつつ、筒井は既存の日本文学・日本文化の価値観や権威を転倒

しようとしていた。60年代のカウンターカルチャーの機運の中での支持もあった。この時期の彼の作品を端的にまとめれば、①SFという新興ジャンルによる日本文化更新の熱量、②政治的な革命と音楽的・遊戯的な革命の緊張関係、③笑いやナンセンスや軽さによる同時代の深刻さの解体、が特徴である。

本発表では「ベトナム観光公社」(1967)「九〇年安保の全学連」(1968)「革命のふたつの夜」(1969)「新宿祭」(1969)「原始共産制」(1969)「泣き語り性教育」(1969)「誘拐横丁」(1970)「万延元年のラグビー」(1972)、エッセイ「視聴覚時代の学生運動」(1968)「安保」(1969)などを具体的に読解することで、この時期の筒井作品を分析し、それを通じて1960年代に起こった日本文学・文化の変動を理解する手掛かりを得ようと思う。

寺山修司の昭和四〇年代

—— 海外視察との関係から ——

静岡大学 堀江秀史

「見世物の復権」を呼び声に、寺山修司が演劇実験室・天井棧敷を結成したのは、昭和四二(1967)年のことである。その後寺山は、映画『トマトケチャップ皇帝』(個人製作、1970)、同『書を捨てよ町へ出よう』(ATG、1971)、同『田園に死す』(ATG、1974)、そして昭和五〇(1975)年の写真集『犬神家の人々』と、テキスト間で相互に関連した、詩的着想と観念の標本箱ともいえる一連の代表的映像作品群を発表していった。昭和四〇年代は、寺山にとって最も重要な作品が次々に世に問われた時期であったといえる。

本発表では、この時期における寺山芸術の充実を、海外視察との関係から捉え直したい。天井棧敷のヨーロッパ公演以前に寺山は、アメリカにも数回渉り、現地の美術や演劇などの芸術動向を視察している。本報告では、当時の寺山の動向を精査して報告するとともに、それらの経験が同じころの天井棧敷の演劇や、上演されなかった寺山版『ヘアー』、そして前述の代表的映像作品群などにおいてどのように作用しているかを考察する。

日本比較文学会東京支部ニューズレター 140号

発行人：源 貴志

編集委員会(編集担当)

委員長：椎名 正博

委員：岩下 弘史 亀井 伸治 越野 剛 庄子 ひとみ 鈴木 美穂
中垣 恒太郎

事務局 事務局長：宗形 賢二

事務局委員：川野 礼音 土田 久美子 芳賀 理彦 畑中 健二
蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒411-8588

静岡県三島市文教町 1-9-18

日本大学国際関係学部

三島駅北口校舎 607研究室(宗形賢二)

TEL: 055-980-1924

E-mail: hikaku.tokyo@gmail.com